

令和 6 年 度 学 校 自 己 評 価 報 告 書

学校教育目標		○勤労と勉学に励み、真理と平和を愛し、実践力のある人間を育成する。 ○豊かな知性と情操を養い、心身ともに健康で、調和のとれた人間を育成する。 ○広い世界観に立ち、親和協調の気風を養い、豊かな社会の建設に貢献しうる人間を育成する。				
本年度の重点目標		○「授業スタンダード」や授業参観、校内外の公開授業を活用するなどして、各教員が授業改善に向けた不断の取組を行う。 ○落ち着いた生活習慣の定着を支援するとともに、生徒会を中心に委員会と連携し、生徒主体の行事の企画・運営に努める。 ○3年間・4年間を見通したキャリア教育を推進し、生徒の自己実現を図るために必要な職業観・勤労観を育成するとともに、生徒一人ひとりの進路実現を目指す。 ○生徒が快適に学べる環境づくり及び多様化する生徒の情報共有を行うための組織的な教育相談体制づくりを進め、健康・安全や防災・減災に努める能力の育成を図る。				
	短期経営目標	具体的な計画	評価項目・評価基準	最終達成状況	評価	改善方策
1 教務課	(1)「授業スタンダード」や授業参観、校内外の公開授業を活用し、各教員が授業改善に向けた不断の取組を行う。	6月と11月の公開授業週間ごとに教務課からテーマやスタイルを設定し、それに則った形で公開授業を実施してもらい、授業づくりの幅を広げるきっかけとしてもらう。	学校評価アンケート 《公開授業週間への取組》 教員 6年度：83% 5年度：92% 4年度：97% 評価基準：A＝90%以上 B＝75%以上 C＝75%未満 ※授業アンケート・学校評価アンケートの結果については、全回答における「よくあてはまる」「ややあてはまる」の回答割合を指す。以降同じ。	6月と違い、11月の公開授業週間は日程的にも余裕があるものであったが、授業参観の件数は結果としては前年度より低調であった。新課程移行より数年経ち授業のあり方の見直しも一段落ついたこともあるだろうが、(2)にあるように観点別評価の活用状況に課題を抱えている現状を踏まえると、授業参観等を通じて、個々の教員が授業づくりの幅を広げていく必要があるだろう。	B	公開授業について、余裕のある日程を設定し、テーマを課外からも公募する。
	(2)生徒が授業内容を振り返る場面を毎時設定し、その振り返りを教員がチェックすることで、生徒の学びの変化を把握し、評価の適正化や授業改善につなげる。	①評価および授業改善の一環として、生徒が授業を振り返る場面を毎時設定し、生徒の学びや生徒の変化を把握し、適正な評価へつなげる。 ②観点別評価の適正な運用を通じて、生徒の能力・資質向上につながるよう、授業者が働きかけを行う。	①授業アンケート 《まとめ・振り返りの設定》 教員 6年度：91.4% (37名中36名回答、回答率97.3%) 5年度：90.0% (38名中31名回答、回答率81.6%) 4年度：89.3% (36名中28名回答、回答率77.8%) 評価基準：A＝90%以上 B＝75%以上 C＝75%未満 ②授業アンケート 《観点別評価を活用した生徒の資質向上への取組》 教員 6年度：77.1% (37名中36名回答、回答率97.3%) 5年度：83.3% (38名中31名回答、回答率81.6%) 4年度：データなし 評価基準：A＝85%以上 B＝70%以上 C＝70%未満	授業アンケートについては、常勤・非常勤を対象に実施し、回答率は左記の通りである。 授業時間の中で「まとめ・振り返り」を設定するスタイルは、ほぼ浸透したように思われる。今後は、ただまとめの時間を設定するという形式的なところに陥らず、「まとめ・振り返り」をどう評価していくかという点が重要になってくるだろう。 観点別評価を通じた資質向上については、「あてはまる」が25.7%と依然として低く、多くの教員にとって引き続きの課題であるといえる。	B	せっかく集めた「まとめ・振り返り」をどう活用していくかについて、評価の在り方を見直すという視点からだけでなく、生徒の能力伸長につなげるという視点からも検証していく必要があるだろう。公開授業週間での設定課題として、「まとめ・振り返り」の活用方法を取り上げるのも一つであろう。
2 生徒課	(1)生徒の基本的な生活習慣が定着し、規範意識を身につけることができるよう支援する。	生徒が、「1人1人の学ぶ権利を守る5箇条」を意識して授業に取り組むよう、全教員で統一して繰り返し指導を行い、5箇条に基づいた規律ある落ち着いた雰囲気や学習環境・生活環境を作る。	○学校評価アンケート 《授業を大切に》 教員 保護者 生徒 6年度：94% 94% 93% 5年度：97% 95% 91% 4年度：94% 98% 96% 評価基準：A＝95%以上 B＝85%以上 C＝85%未満 ○学校生活アンケート《落ち着いた学校生活》 生徒 6年度：75% 評価基準：A＝85%以上 B＝70%以上 C＝70%未満	多くの生徒が授業に前向きに取り組み、全体的にはルールを守って落ち着いた学校生活を送っていた一方で、1年生を中心に問題行動も複数見られた。生徒指導において、生徒の成長に繋がる効果的な指導を考える必要性、保護者との協力体制や教員の組織的な連携の不可欠さを改めて感じた。学校が、生徒全員にとって安心安全に生活できる場であるよう、これからも全職員で多方面から指導を継続していきたい。	B	これまで通り、今後も継続して根気強く指導を行っていく。早めの報連相の徹底と、情報共有をしっかりと行い、足並みを揃えた指導を行うとともに、複数で対応していく。また、各所と連携をとり、組織的に問題行動の未然防止、早期対応に努める。
	(2)生徒が学校行事や部活動・委員会活動等に積極的に参加し、社会人基礎力を身につけることができるよう支援する。	多くの生徒が積極的に諸活動に参加できるよう、生徒会を中心に学校行事の企画・運営に努め、行事内容の充実を図るとともに、各種委員会と協力し、個々の生徒の可能性の伸長を図る。	学校評価アンケート 《学校行事・生徒会活動・部活動に積極的に参加》 教員 保護者 生徒 6年度：100% 93% 96% 5年度：100% 98% 92% 4年度：100% 98% 96% 評価基準：A＝95%以上 B＝85%以上 C＝85%未満	校内外全ての行事において、生徒会中心に多くの生徒たちの主体的で積極的な参加があり、個々の生徒の個性に応じた活躍が多く見られた。地元の夏祭りへの参加や、文化祭等での取組を通して、生徒の持つ可能性の大きさを感じた。また、生徒会と各委員会との協力体制もでき、新たな挑戦が見られるなど、活動の幅が広がっている。	A	行事の活性化と生徒の積極的参加により、個々の生徒が活躍する場が増えていく。今後も生徒の「やってみたい」という思いや声は、可能な限り取り入れ、生徒たちの持つ可能性の伸長を図るとともに、達成感や自信に繋げていきたい。

	短期経営目標	具体的な計画	評価項目・評価基準	最終達成状況	評定	改善方策
3 進 路 課	(1)キャリア教育を充実させ、自己の将来を主体的に考え行動できる能力の育成を図るとともに、適切な進路情報の提供を行って進路意識の向上を目指す。	①生徒の実態把握に努め、進路行事と進路総探を検討・実践し生徒の進路意識の向上を目指す。また進路課だよりやHPを通じて、生徒や保護者への適切な進路情報の提供を行う。 ②各学期に進路希望調査を実施し、教員間で情報を共有すると共に、生徒一人ひとりの実態に即した進路指導に役立てる。 ③今未来手帳の活用を促し、進路講演会や日々の連絡での利用頻度を上げる。	①学校評価アンケート 《キャリア教育の実践》 教員 保護者 生徒 6年度：100% 90% 92% 5年度：100% 98% 92% 4年度：100% 98% 99% 評価基準：A=90%以上 B=85%以上 C=85%未満 ②進路希望調査にて未定生徒の推移で評価する。 進路希望未決定者数（割合）（次年度卒業学年） 6年度：2/40(5%) 5年度：9/30(30%) 4年度：8/26(30.7%) 評価基準 A：未定の生徒が20%未満 B：上記が20%以上40%未満 C：上記が40%以上 ③1学期末にアンケートをとって振り返りと働きかけを行い、2学期末の最終アンケートで評価する 評価基準 A：手帳利用が「一週間に数回」以上の生徒が60%以上 B：上記の生徒が40%以上60%未満 C：Bに満たない場合 R5の2学期末での生徒アンケート結果 手帳利用が「一週間に数回」以上の生徒の割合 1年 44% 2年 11% 3A 14% 卒業学年 17% 「活用できていない」 1年 17% 2年 15% 3A 14% 卒業学年 33%	生徒の実態を把握し、進路行事や総探の内容を検討・実践することができた。行事ごとの生徒の自己評価も高かった。ただ、行事を受けての進路意識の向上や自己分析など今後に向けて必要とする場面では、継続的な効果は薄かったように思う。保護者向けの進路課だよりは定期的に発行できたが、生徒向けは発行回数が少なく、適切な進路情報の提供があまりできなかった。 昨年度より未定者数は減っている。担任・学年団・進路課の働きかけだと感じる。また進路希望を把握し、個々への声かけを継続して行っていた結果でもあると思う。 手帳利用に関しては、2学期末の時点で残念ながら数値を下げた。内訳を見ると、学年によって大きく差があり、習慣化していくにはまだ時間を要するようである。けれども、手帳は便利なのだと答えた生徒は79%、メモを取ることは大切だと答えた生徒は92%にのぼる。この前向きな意見を好意的にとらえ、進路課を中心に担任・学年団側の小まめな働きかけが必要であると考える。 手帳利用アンケート結果（1学期末） ○手帳利用が「一週間に数回」以上の割合 1年27.1% 2年52.8% 3年28.1% 4年12.5% ○「活用できていない」割合 1年22.9% 2年7.5% 3年21.9% 4年25% 手帳利用アンケート結果（2学期末） ○手帳利用が「一週間に数回」以上の割合 1年13.6% 2年28.8% 3年12.5% 4年0% ○「活用できていない」割合 1年31.8% 2年9.6% 3年28.1% 4年42.9%	B	生徒の実態を的確に把握し、進路行事の精選、総探での学習内容の修正等を行いたい。また定期的に進路課だよりの発行、行事ごとのHP掲載を行い、生徒への働きかけと共に保護者への情報提供を行っていききたい。 未定者数の減少を受けて、4月より本格的な進路活動が始まるので、生徒への声かけ・働きかけを3学期と春休みを有効に使い、4月から進路への意識づけをしっかりと行っていきたい。また卒業予定者数も以前に比べて増えるため、学年団と連携し、計画的に動いて行く必要がある。 手帳利用に関しては、年1回手帳の有効性や使い方の講演会を実施しているが、最初の導入として今後も継続実施する。またメモの取り方やスケジュール管理の方法など、具体的な使い方をこまめに示すなどして、手帳を使うメリットを少しでも感じられる働きかけを進路課を中心に、担任・各学年団と連携し行って、3年間・4年間を通じて少しずつでも習慣化していけるよう工夫していききたい。
	(2)就労体験や進路相談を通して、個々の生徒の進路希望に応じたきめ細やかな進路指導に努める。	①アルバイトやインターンシップ参加の働きかけを行い、進路意識の向上に効果的に機能するよう努める。	①学校評価アンケート 《進路指導の実践》 《キャリア教育の実践》 教員 保護者 生徒 6年度：100% 90% 92% 5年度：100% 92% 92% 4年度：97% 95% 97% 評価基準：A=90%以上 B=85%以上 C=85%未満 ①各学期で実施しているアルバイト調査でアルバイト状況を把握する。 6年度 アルバイト実施者 56名（41.4%） 5年度 アルバイト実施者 49名（40.5%） 評価基準 A：参加生徒が50%以上 B：上記が30%以上50%未満 C：上記が30%未満 ①春・夏それぞれのインターンシップの参加状況を把握する。 6年度 春夏のべ70名（51.8%） 5年度 春夏のべ65名（53.7%） 評価基準 A：参加生徒が50%以上 B：上記が30%以上50%未満 C：上記が30%未満	今年度もアルバイト情報の掲示をしたり、各クラスにファイル置いて情報の提供を行った。またアルバイトを探している生徒がいれば個々に声かけも行い、採用へつなげた。企業によっては求人情報と共にアルバイト募集も持参して訪問されるケースが増えてきた。学校の実態を知っている企業であれば安心感もあるのが現状ではある。しかし生徒によっては、なかなか採用されないケースもあり、アルバイト採用の難しさも浮き彫りとなった。 一方で、インターンシップへの参加者数に関しては、今年度より1年生は学校生活に慣れることを優先し、この3月からの参加に変更した影響もあるが増えつつある現状である。慢性的な人手不足での求人増の影響で、企業もインターンシップの受け入れに積極的である。ただ参加者数に応じて対応をお願いする企業・事業所数も、ここ数年増えたため、職種に応じて企業を精選し、生徒対応や事務作業など教員の負担を減らすよう努めた。保護者も進路に向けて意識が高くなりつつあり、インターンシップに関して前向きに捉えている傾向があると感じる。今後積極的な参加への働きかけを行っていききたい。ただインターンシップをきっかけにアルバイトへつなげる事は難しかった。	B	来年度もアルバイト情報の掲示をしたり、各クラスにファイル置いて情報の提供を行っていききたい。またアルバイトを探している生徒がいれば個々への声かけも継続して行っていきたいと思う。また総探の時間を使うなどして、履歴書作成や電話のかけ方などを進路学習の一貫として取り上げていくことで少しでもハードルを低く感じられるよう進路課としても動いていきたい。 インターンシップに関して、年々参加生徒数が増えているため、進路意識の向上が少しづつでも感じられる。自分の進路を考えていく上で自己理解にもつながること、社会性も学べることで有効であると考えられるが、多様な生徒が多いので、生徒への理解を促した上で受け入れ企業の選定も併せて大事になってくると考える。 インターンシップをきっかけにアルバイトへとつなげることが難しかったので、上記に示したように総探の時間を工夫していききたい。

	短期経営目標	具体的な計画	評価項目・評価基準	最終達成状況	評定	改善方策
3 進路課		②卒業学年には、進路課面談、就職・進学に向けて全教員による面接指導を実施する。在校学年には、学期ごとに担任面談及び個々の生徒の実態に応じた進路指導を実践する。	②卒業学年の進路決定者数の推移で評価する。 評価基準（12月末時点） A：90%以上 B：75%以上 C：75%未満 ②在校学年の進路未決定者数（次年度卒業学年）の推移で評価する。 6年度：2/40（5%） A：未定の生徒が20%未満 B：上記が20%以上40%未満の場合 C：上記が40%以上 ②学校評価アンケート 《担任による面接、進路面談》 教員 保護者 生徒 6年度：100% 94% 94% 5年度：100% 92% 92% 4年度：97% 95% 97% 評価基準：A=90%以上 B=85%以上 C=85%未満	卒業学年の進路決定者数は26名で全体の92%となり、昨年よりも数値が上がった。生徒・保護者に対しての担任・主任・年団、そして進路課の的確な働きかけがあったからだと感じる。また在校学年での進路未決定者数も減少しており、担任・年団・進路課の働きかけと共に、進路希望を把握し、個々への声かけを継続して行っていた結果でもあると思う。早め早めの進路把握は、適宜面接・面談を行うことが有効であるため、今後も進路に関する内容を含めて話をしてもらい、情報の収集をしていきたい。また数値を見る限り、保護者への連絡も必要だと感じる。担任裁量によるが、新たな情報収集と捉える必要がある。	B	進路未決定者数の減少を受けて、早めの進路把握を行い、個々の生徒への働きかけを行うためには、情報の収集と共に情報の蓄積が大切だと感じる。今後も継続して卒業学年に関して、担任面接・進路面談の際に、進路に関する内容を入力シートへ適宜担任から入力をしてもらう予定である。情報の収集と共有を図るために有益であると考え。今後も生徒・保護者・担任・年団・進路課が連携・協力して進路決定へ動いていき、一人でも多くの進路実現を図っていききたい。 面接指導に関しても、進路課を中心に適宜担任にも入ってもらいながら実施した。今後も担任または年団が適宜入り、多くの先生方に協力してもらいながら、しっかり指導できる体制づくりを確立していきたい。
4 厚生課	（1）健康・安全・防災・減災に関する知識の啓発と、保護者との連携・協力で、生徒が健康で安全な生活を営むための意識を向上させるとともに、その能力・態度の育成を図る。	①健康・安全及び防災に関して生徒や学校の実態に即した情報の提供を印刷物・掲示物・電子媒体によって行うとともに、保護者との連携・協力のもと、健康・安全に対する知識の啓発に取り組む。	①学校評価アンケート 《健康の増進と安全保持、防災・減災意識の向上》 教員 保護者 生徒 6年度：91% 92% 96% 5年度：97% 95% 93% 4年度：100% 92% 99% 評価基準：A=90%以上 B=85%以上 C=85%未満	年末からのインフルエンザの流行により、欠席・欠課数が増加している状態が続いている。生徒自身の健康・安全に対する意識が高まるような指導や呼びかけに取り組んでゆきたい。	B	来年度も生徒への健康・安全に関する呼びかけを様々な伝達媒体を活用したり、委員会活動で取り組ませたい。
		②生徒の心身の健康状態を的確に把握し、疾病治療の必要性を個に応じて懇談や紙、電子媒体によって知らせる。	②《疾病治療率》 眼科 歯科 6年度：44.1% 30.9% 5年度：32.2% 16.6% 4年度：57.1% 17.2% 評価基準：A=70%以上 B=50%以上 C=50%未満	面談等を通じて、未受診者への啓発を行ったが、疾病治療率は低くなり、改善には至っていない。		
		③事故防止及び災害に対する啓発を計画的に実施し、安全教育や防災・減災に対する意識の向上を図る。	③学校評価アンケート 《健康の増進と安全保持、防災・減災意識の向上》の項目を元に総合的に評価する。 評価基準：A=90%以上 B=85%以上 C=85%未満			
	（2）ユニバーサルデザインを基本とした教室整備を進めて、落ち着いた学習できる環境づくりに取り組む。また、年団を超えて、生徒情報の交換・共有を行い、効果的かつ効率の良い相談支援・指導体制の充実を図る。	①ユニバーサルデザインの周知、広報を行い、ユニバーサルデザインに立脚した教室整備に取り組み、学習しやすい環境作りを行う。 ②教室内の環境美化に係る重点目標を一定期間ごとに定めたり、ポスター作成や掲示物での情報提供、清掃ボランティアへの参加により生徒に実践を促す。	①学校評価アンケート 《教室整備》 教員 生徒 6年度：92% 83% 5年度：97% 85% 4年度：100% 84% 評価基準：A=90%以上 B=85%以上 C=85%未満 ②学校評価アンケート 《環境美化意識》 教員 生徒 6年度：83% 88% 5年度：97% 90% 4年度：97% 94% 評価基準：A=90%以上 B=85%以上 C=85%未満	年度当初の教室開きからの、ユニバーサルデザインに基づいた教室づくりが定着している。 学校全体の美化は保たれてはいるが、一部で、清掃や点検が不十分だったところがある。来年度は美化委員の活動として生徒による環境美化の活動を進めてゆきたい。	B	各HRなどでの「教室のユニバーサルデザイン」についての工夫を取り上げ、全体に周知をさせるようにしてゆきたい。 美化委員会の活動内容を明確にして、年間を通じて美化活動に取り組みたい。

	短期経営目標	具体的な計画	評価項目・評価基準	最終達成状況	評価	改善方策
4 厚生課		③印刷物や掲示物で情報の提供を行うと共に、配慮を要する生徒へのきめ細やかな教育相談・特別支援教育を推進し、SC、SSW、教育相談員や外部機関と教職員間の連携をとり、年団を超えて相談支援や特別支援体制を確立する。	③学校評価アンケート 《特別支援》 教員 保護者 生徒 6年度：97% 90% 90% 5年度：100% 95% 82% 4年度：100% 88% 84% 評価基準：A=90%以上 B=85%以上 C=85%未満	教育相談への理解は定着していると思われるが、生徒の一部には教育相談そのものへの敷居が高いと誤解をしているものがある。今後も、学校全体での教育相談の周知や個別に生徒へ呼びかけを進める必要がある。		来年度、教育相談等の活動を身近に思えるものにするため、教員・生徒・保護者の三者での連携をより密に行っていく。また全学年の生徒の様子等を教育相談や各年団、関係機関等で共有し、対応していく。 「個別支援計画」は記録だけでなくとどまらず、有効に機能をしてゆけるようにしてゆきたい。
		(1) 生徒が教育活動の中で自己有用感を実感できるように、場面の提供に加え、個に応じた働きかけや支援を行う。	(1年団) 生徒面談により生徒状況の把握に努める。保護者との連携も密に行う。部活動、各種の行事、ボランティア活動にも積極的に参加できるように促す。 学校評価アンケート 《保護者との連携》 保護者 生徒 6年度 82% 5年度 100% 4年度 88% 評価基準：A=90%以上 B=85%以上 C=85%未満 校内外ボランティアへの参加率 評価基準：A=90%以上 B=85%以上 C=85%未満	気になる生徒には声をかけ、現状把握を早期に問題解決に当たることが出来た。また、家庭との連携を密にすることを心掛けた。一部の家庭との関係が困難な場合は第三者機関を通じて何とか連絡が取れた。 清掃ボランティアには年間を通じて少なくとも70%の生徒の参加を期待したが、53%にとどまった。 体育祭や文化祭等の学校行事には積極的に参加していた。	C	家庭との直接連絡が取れることを当たり前とした家庭とのつながりを保護者と作る必要がある。 地域社会の貢献を意識させる一つとして参加しやすい清掃ボランティアの位置づけを意識させる。
5 年団		(2年団) 保護者への連絡、生徒面談を綿密に行い、個々の適性理解に努め、生徒が自己有用感を高められるよう、段階的な目標設定や指導を行うとともに、適切な役割を与えて、生徒が主体的に取り組むやすい機会を設定する。	(2年団) 学校評価アンケート 《保護者との連携》 保護者 生徒 6年度 2年団：97% 96% 5年度 1年団：100% 95% 評価基準：A=90%以上 B=85%以上 C=85%未満	アンケートの結果の肯定的評価は保護者、生徒ともに昨年度とほぼ変わらず、高い評価を得ることができた。定期的な生徒面談や保護者連絡に加え、タイミングを逃さずに、必要に応じた声掛けや連絡をすることができた。これらをふまえてさらに、主体的に行動する、新たなことに挑戦する、自分の短所を修正することができた生徒が多くいる。今後は、生徒の卒業後を見据えた、より高い、具体的な目標設定を目指す。	A	クラス・学年を超えて連携して指導ができるよう、多くの教員と情報を共有し、一貫した協力体制を作る。また、保護者と生徒の間に入り、家庭での会話を密にできるよう、両者の連携を促す。
		(3, 4年団) 学校行事や進路活動を通して、自己の目標や目の前の課題に全力で取り組む素養を育成する。また、教育活動の中で生徒一人ひとりの経験を教員とともにフィードバックする場を提供する。	(3, 4年団) 学校評価アンケート《真備陵南高校に来てよかったと思う》 保護者 生徒 (卒業学年生徒) 6年度：92% 89% 93% 5年度：99% 91% 4年度：92% 98% 評価基準：A=95%以上 B=90%以上 C=90%未満 生徒の学校行事や進路活動への参加度を学年団の教員でみると 6年度 3, 4年団の教員アンケート結果 76%の参加 評価基準：A=生徒の80%以上が積極的に参加 B=生徒の70%以上が積極的に参加 C=積極的な参加度が70%未満	卒業学年の生徒を見るとほとんどすべての生徒が学校行事や進路活動に前向きに取り組んでいた。最上級生の自覚を持ち、他学年と交流をしている部分も見受けられ、行事の際には後輩たちを引っ張ったり、アドバイスを送ったりするなど3年間4年間の学びが生かされていると感じた部分が多く存在した。また年団のほとんどの教員が各行事ごとにフィードバックを行っていたと感じており、連携が取れていたように感じた。しかし、4修の3年生ではいまだに学校生活の中で前向きに参加できていない生徒も複数在籍しているため、引き上げる必要性を強く感じた。	B	進路先での様子などを状況によっては聞き取りを行ったり、卒業後も相談に乗ったりする。4修3年生においては今年度の卒業学年を踏まえ、進路への意識づけや各種行事等での密な声掛け、該当学年との連携を行っていく。
	(2) 社会人基礎力について、入学から卒業までを見据えた継続的な育成ができるよう年団間で連携を進める。	(1年団) 基本的な生活習慣を確立し、落ち着いた環境の中で学習に取り組む学習習慣を身に付け、進路目標に向けての展望を開き、社会人基礎力を養う。	(1年団) 学校評価アンケート 《自分自身の進路実現》 生徒 6年度 92% 5年度 92% 4年度 97% 評価基準：A=90%以上 B=85%以上 C=85%未満	ほとんどの生徒は生活に乱れもなく基本的な生活が習慣として身に付いている。特定の生徒に遅刻や欠席が目立った。全体への注意喚起と個別指導により、根気よく声掛けを行ったが、定期考査中でも残念ながら全員がそろそろことがなかった。 時間(期限)を守るという根本的なことが行動に表れなかった。	C	常々声かけをしながら生活習慣の育成を図っていく必要がある。学習環境を整え、日々の授業に集中して取り組める意識付けが必要である。 「時間を守ること」が生活だけでなく、学習課題においても期限を守った行動につながることを自覚させる。

	短期経営目標	具体的な計画	評価項目・評価基準	最終達成状況	評定	改善方策
5 年 団		(2年団) 生徒が授業や行事等に主体的に取り組むために、自ら先を読み確実な準備をするよう促すとともに、進路実現を見据えて積極的かつ適切な表現力を身につけようとする態度を養うよう、年団全体で組織的な指導を行う。	(2年団) ①学校評価アンケート 《社会に適応する力》 保護者 生徒 6年度2年団: 100% 90% 5年度1年団: 98% 96% 評価基準: A=90%以上 B=85%以上 C=85%未満 ②年団教員による評価 (教員それぞれが、2年生の生徒全員を、4段階で評価する)「肯定的な評価の割合」 評価基準: A=90%以上 B=85%以上 C=85%未満	「年団教員による評価」の肯定的な回答率は57%であった。2学期以降、進路意識向上を目指して、面談等により高く、具体的な目標設定をしていくことで、生徒は真剣に悩んだり、挑戦した結果、苦勞することもあった。それでも進路実現に向けて少しずつ、確実に形になりつつある生徒が増えており、生徒の主体性や積極性を育むことができ、水準の底上げをすることができた。	B	卒業後を見据えた、より具体的で、高い水準の目標を設定する。 生徒が自分事と捉えられるよう、生徒が自ら考え、発信できるよう指導していく。
		(3, 4年団) 生徒一人一人の健康課題を把握し、声掛けを通して、基本的生活習慣を確立させる。また自己の課題を発見し、計画的に課題解決に取り組まされるように年団内はもとより、年団の枠を超えて情報共有し関わっていく。	(3, 4年団) 学校評価アンケート 《社会に適応する力》 教員 保護者 生徒 6年度: 86% 94% 92% 5年度: 97% 94% 89% 4年度: 94% 97% 92% 評価基準: A=90%以上 B=85%以上 C=85%未満 長欠者(30日以上)の割合 6年度(3,4年生): 18% 5年度(2年生): 21% 4年度(1年生): 27% 評価基準: A=15%未満 B=25%未満 C=25%以上	進路に向かって邁進し、自己の課題解決に向けて努力を積み上げられた生徒がいた反面、進路決定後に出席率が下がるなど、モチベーションが低下している生徒が見受けられた。また2学期後半から継続した出席ができず、欠席日数がかさんだ生徒が複数おり、生徒の年間を通じてのモチベーションの維持に課題が表出する形となった。生徒本人の体調面での欠席もさることながら、怠惰傾向や登校意欲の低下から欠席が増え、長欠者として計上される生徒も存在するため、保護者との連携と本人への声掛けが必要不可欠である。	B	卒業学年については個人の課題や長所など自身のアイデンティティに関わる部分を卒業までに伝え、社会に出た後も、自己の課題を認識し、成長を続けることの意義を伝えていく。4修3年生については次年度に向けて今年度1年間を振り返り自己の出席状況がどうだったかを考え、対策や改善点をともに考えたうえで引き継いでいきたい。
6 学 校 運 営	(1)地域社会や外部機関との連携を進めることで社会に開かれた学校づくりに向け、広報活動を通じて本校の魅力を積極的に発信する。	①各種ボランティア活動やインターンシップ、地域のイベントへの参加について、全体に呼びかけるとともに、必要な生徒には個別に促す。	①ボランティア、インターンシップ等校外での活動への参加状況 (少なくとも1回は参加した者) 6年度: 66.9% (12月時点) 5年度: 68.8% (清掃ボランティア、インターンシップを集計) 評価基準: A=80%以上 B=70%以上 C=70%未満	12月実施の清掃ボランティアに73名参加した。インターンシップについては春季休業中の参加状況がまとまっておらず数値に反映できていない。新たに1年生が参加するようになるので、夏季休業中よりも多くの参加が見込まれる。校内行事ではあるが、課題研究の一環として陵南カフェに新規で取り組んだ。また、土師邸マルシェに商業、農業の商品を出品し、好評を得た。	B	ボランティアやイベントについて、集団では積極的な参加が見られたが、個人単位での参加に課題がある。担任からの声掛けとともに担任同士の情報交換を密にしていきたい。 土師邸での活動については課題研究の時間に生徒が訪問するなどして、地域の方に生徒の顔が見える活動にしていきたい。
		②本校ホームページに最新の情報が掲載されるように更新を進め、また、日々の出来事を「陵南ニュース」へ積極的に投稿する。 ホームページ以外の媒体に取組が紹介されるよう働きかける。	②ホームページのブログ記事「陵南ニュース」の更新(月ごとの平均回数) 5年度: 年間7回(月平均0.6回) 4年度: 年間24回(月平均2回) 評価基準: A=2.5回以上 B=2回以上 C=2回未満 ③ホームページ以外の媒体による本校の紹介(複数のメディアに紹介されることを目指す) 学校評価アンケート《協働体制づくりが進んでいる》 教員 6年度: 83% 5年度: 92% 4年度: 91% 評価基準: A=95%以上 B=90%以上 C=90%未満 年団主任会、課長会議による情報交換の頻度(主任会は月3回、課長会議は月1回を目安) 12月時点で年団主任会18回、課長会議2回開催	12月末時点での「陵南ニュース」更新は2回のみとなっており、2学期に更新できていない。また、インスタグラムの活用についても実現できていない。 ホームページ本体については最新の情報に更新できている。		行事や部活動の大会での写真素材は豊富にある。一手間加わるが、写真を保存する際にブログへの投稿もセットできるように声掛けをするとともに、フォーマットを明示することでブログ作成のハードルを下げたい。 他の媒体への投稿はブログを流用できるものと考えている。
	(2)各課・年団内の業務において協力・協働体制の確立を図るとともに、分掌・年団を越えたつながりも密にすることにより、組織力のある学校づくりを進める。	通常業務の中で報・連・相を密にすることに加え、年団主任会、課長会議を定期的に開催することにより情報共有を図るとともに課長・主任が課・年団を越えて業務を見渡せるようになる。	学校評価アンケート《協働体制づくりが進んでいる》 教員 6年度: 83% 5年度: 92% 4年度: 91% 評価基準: A=95%以上 B=90%以上 C=90%未満 年団主任会、課長会議による情報交換の頻度(主任会は月3回、課長会議は月1回を目安) 12月時点で年団主任会18回、課長会議2回開催	学校評価アンケートの結果については、課内、年団内での協働はできているものの、その組織を越えての情報共有、連携に課題があるものと分析している。 年団主任会は生徒指導の内容中心ではあるが、生徒情報交換に役立っている。課長会議は必要最低限の開催となった。	C	様々な業務に対して、個人で抱え込まず複数人で取り組むような雰囲気づくりと声掛けをしていく。 現在、運営委員会では当月の職員会議で提案する議題についての協議が中心となっているが、学校全体が抱えている課題やテーマについて議論する機会を検討したい。